

幼児期の教育と児童期の教育の円滑な接続を図るカリキュラムの研究

千葉県総合教育センター
カリキュラム開発部研究開発担当
研究指導主事 黒川 健二

1 主題設定の理由

少子化，核家族化，地域社会の教育力の低下，高度情報化等，教育をめぐる社会環境が大きく変容し，様々な課題が生じてきている。特に，幼児期から児童期にかけての教育において，一部の子どもは，自制心や耐性，規範意識が十分に育っていないことが課題となっている。小学校入学直後に，授業中に立ち歩く，話を聞けない，おしゃべりが多い，落ち着きがない，床に寝そべる，担任の指示通り行動できない，他者との関係が十分にとれない等の「小1プロブレム」が問題となっている。

また，子どもの発達や学びの連続性の保障も，重要な課題である。「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」（平成22年，以下「報告」という。）によれば，「ほとんどの地方公共団体（都道府県教育委員会 0%，市町村教育委員会 99%）が幼小接続の重要性を認識」しているにもかかわらず，幼稚園と小学校の交流は，年数回の授業，行事，研究会などの交流（69.6%の幼稚園・小学校で実施，平成26年度文部科学省幼児教育調査）程度にとどまり，接続を見通した教育課程の編成・実施（幼稚園・小学校で実施 17.0%）・検討は，十分には進んでいないことが現状である。このことから，幼児期の教育と小学校の教育は，連続性・一貫性を確保しながら双方が円滑に接続し，体系的な教育を組織的に行うことが喫緊の課題である。

国においては，教育基本法の改正（平成18年），学校教育法の改正（平成19年）により，幼稚園における教育が小学校以降の学校教育の基礎として明確に位置づけられるなど，これまで以上に幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続や，そのための連携の必要性が強調されるようになった。文部科学省と厚生労働省が共同で事例集を作成・周知するなどの取組が行われ，平成22年には前述の報告がなされた。また，平成29年3月に告示された幼稚園教育要領，保育所保育指針，幼保連携型認定こども園教育・保育要領（以下「幼稚園教育要領等」という。）及び小学校学習指導要領においては，幼児期の教育及び保育と小学校教育の円滑な接続を図るよう努めることが明記されている。

一方，千葉県では，第2期教育振興基本計画「新 みんなで取り組む『教育立県ちば』プラン」（平成27年）において，「人格形成の基礎を培う幼児教育の充実」を新たに掲げ，幼児教育推進体制の構築を最重要課題としている。これを受けて千葉県教育委員会では，平成28年度から文部科学省の委託による「幼児教育の推進体制構築事業」に参加している。本事業では，幼児教育の質的向上を促進するため，県総合教育センターに「幼児教育アドバイザー」を配置し，「幼児教育センター」としての機能をもたせることで，幼児教育推進体制の構築を図っている。さらに，幼児期の教育から小学校教育への円滑な接続を図るために，平成30年度までに，「接続期

のカリキュラム千葉県モデルプラン」(以下、「接続期のカリキュラム」という。)を策定し、県内すべての幼稚園・保育所・認定こども園(以下「幼稚園等」という。)及び小学校に配付することを目標としている。

そこで本研究では、「幼児期の教育と児童期の教育の円滑な接続を図るカリキュラムの研究」を主題として設定し、接続期のカリキュラム作成の実務組織となる「カリキュラム作成ワーキンググループ」での協議や、幼稚園等及び小学校での活動実践を通して、幼児期の教育と児童期の教育の円滑な接続の在り方を明らかにする研究を行う。

2 研究の目的

- ・「接続期のカリキュラム千葉県モデル」の作成を通して、幼児期の教育と児童期の教育の円滑な接続の在り方を明らかにする。

3 研究内容

- (1) 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続に関する基礎研究
- (2) 「カリキュラム作成ワーキンググループ」を通じた実践事例研究
- (3) 「接続期のカリキュラム千葉県モデル」の作成

4 研究計画

- (1) 平成 29 年度
 - 基礎研究
 - 「カリキュラム作成ワーキンググループ」の運営・協議
 - 「5 歳児の学びのカリキュラム」の活動実践
- (2) 平成 30 年度
 - 「カリキュラム作成ワーキンググループ」の運営・協議
 - 「スタートカリキュラム」の活動実践
 - 「接続期のカリキュラム千葉県モデル」の作成・配付
 - 研究のまとめ

5 研究概要

(1) 基礎研究

ア 幼児教育において育みたい資質・能力

今回の改訂において、全ての教科等について育成を目指す資質・能力が三つの柱に基づき整理された。このことは、幼児教育から高等学校教育までを通じて、見通しをもって系統的に示す必要があることから、幼稚園教育要領等においても、資質・能力の三つの柱について幼児教育の特質を踏まえた整理を行い、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」という現在の領域構成を引き継ぎつつ、内容の見直しが行われた。幼児教育において育みたい資質・能力は、以下のとおりである。

知識及び技能の基礎

豊かな体験を通じて、幼児が自ら感じたり、気付いたり、分かったり、できるようになったりすること

思考力、判断力、表現力等の基礎

気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりすること

学びに向かう力、人間性等

心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとすること

「幼稚園教育要領」p.6より抜粋

イ 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

幼児教育と小学校教育の円滑な接続を図る観点から、5歳児修了時までに育ってほしい具体的な姿について項目に整理した「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示された。これにより、幼稚園等において幼稚園教育要領等の改訂の方向性と、内容の整合性が図られた。

また、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、答申においても5歳児後半の評価の手立てともなるものと示されており、幼稚園等と小学校の教員がもつ5歳児修了時の姿が共有されることにより、幼児教育と小学校教育の円滑な接続が期待されている。

ウ 接続期のカリキュラム

(ア)「5歳児の学びのカリキュラム」

「5歳児の学びのカリキュラム」とは、幼稚園教育要領等において示された「育みたい資質・能力」及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を考慮し、遊びや生活の中で「見方・考え方」を育む学びのカリキュラムである。本研究では、5歳児の月から3月までの期間に焦点化して取り組む。

(イ)「スタートカリキュラム」

「スタートカリキュラム」とは、小学校に入学した児童が、幼稚園等において経験した遊びや、生活を通じた学びと育ちを基礎として、主体的に自己を発揮し、新しい学校生活を創り出していくためのカリキュラムである。本研究では、小学校1年生の4月から7月までの期間に焦点化して取り組む。

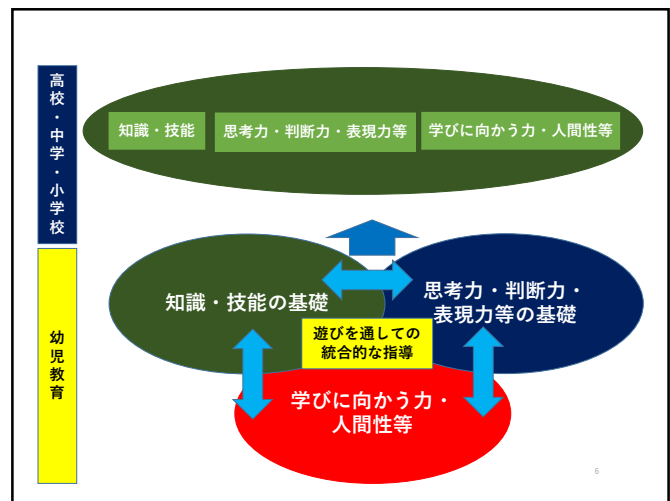


図1 幼児教育において育みたい資質・能力の整理

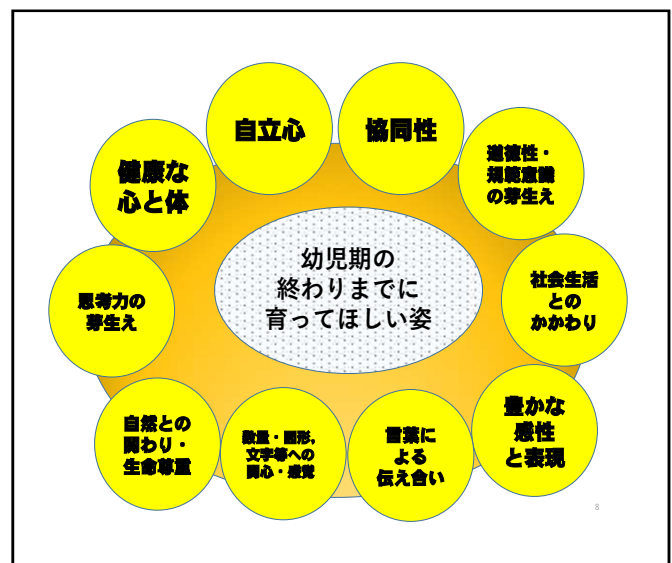


図2 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

(ウ) 円滑な接続を図るカリキュラムのポイント

幼児期の教育では、を手掛かりとしながら、幼児の得意なところや更に伸ばしたいところを見極め、それらに応じた関わりをしたり、より自立的・協同的な活動を促したりするなど、意図的・計画的な環境の構成に基づいた総合的な指導の中で、バランスよく「見方・考え方」や資質・能力を育んでいくことが大切である。

これを受け小学校の教育では、児童が生活の流れの中で「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を発揮できるよう、生活科を中心とした合科的・関連的な指導や、短時間学習などを含む授業時間や指導の工夫、環境構成等の工夫を行うなど、幼児期に総合的に育まれた「見方・考え方」や資質・能力を、徐々に各教科等の特質に応じた学びにつなげていくことが大切である。

エ 「保幼小連携・接続実態調査」の実施

幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続を考えていく上で、県内の幼稚園等及び小学校がどのような連携・接続の取組を行っているか、接続期のカリキュラムについて、どのような認識をもっているかを調査した。アンケート対象施設は、県内から抽出した幼稚園等 166 園，小学校 74 校である。

アンケートの内容は、以下のとおりである。

- ・ 幼児児童を中心とした交流活動について
- ・ 教職員同士の連携について
- ・ 円滑な接続に向けた取組について
- ・ 「5 歳児の学びのカリキュラム」及び「スタートカリキュラム」について

(2) 「カリキュラム作成ワーキンググループ」の運営・協議

ア 「カリキュラム作成ワーキンググループ」の概要

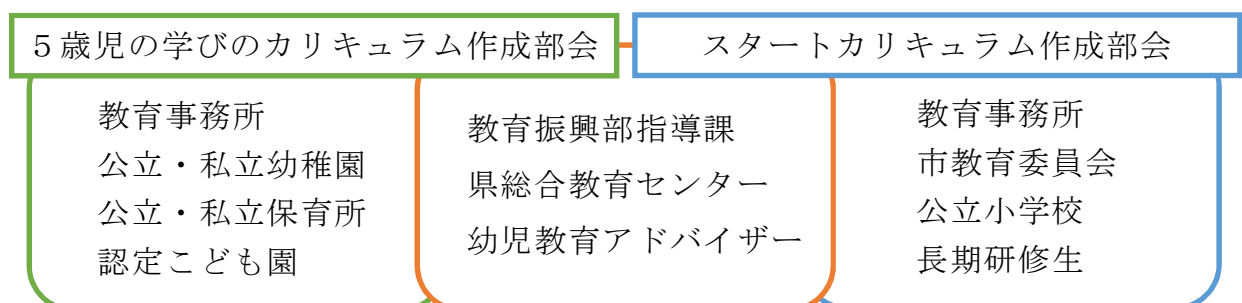
(ア) 目的

保幼小の円滑な接続に資するための小学校入学前後の接続期のカリキュラムを作成する。

(イ) 組織

「5 歳児の学びのカリキュラム」作成部会及び「スタートカリキュラム」作成部会によって構成する。

(ウ) 各部会の構成



イ ワーキンググループ会議の内容

平成 29 年 6 月から平成 30 年 1 月まで 5 回を実施した。第 1 回から第 5 回の協議内容は、以下のとおりである。

会議	実施月	協 議 内 容
第 1 回	6 月	接続期カリキュラムの実施状況とその課題
第 2 回	7 月	「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の共通理解
第 3 回	8 月	接続期のカリキュラム活動計画の作成
第 4 回	9 月	幼児教育と小学校教育とのつながり
第 5 回	1 月	「5 歳児の学びのカリキュラム」活動実践の振り返り

第 1 回から第 3 回までは、「5 歳児の学びのカリキュラム」及び「スタートカリキュラム」の作成部会ごとに協議を進めた。接続期のカリキュラムの実施状況とその課題について情報交換、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の共通理解、接続期のカリキュラムの活動例を出し合い、実践に向けてリストアップした。

第 4 回以降は、月以降の「5 歳児の学びのカリキュラム」の活動実践に向け、両作成部会の情報交換を密にするため、近隣地域を軸に交流グループを組織し、共に接続期のカリキュラム作成に向けた協議を行うことにした。交流グループの編成は、以下のとおりである。

	5 歳児の学びのカリキュラム作成部会	スタートカリキュラム作成部会
A	浦安市立青葉幼稚園 浦安市 みのり保育園	柏市立藤心小学校 船橋市立湊町小学校
B	千葉市 めぐみ幼稚園 富津市立中央保育所	白井市立桜台小学校 印西市立大森小学校
C	館山市立九重こども園 木更津市 岩根みどり幼稚園	勝浦市立勝浦小学校

交流グループは、公立・私立、園・学校の種別等を考慮しつつ、県北西部を中心とした A グループ、県中部を中心とした B グループ、県南東部を中心とした C グループとした。これは、地域により実情の大きく異なる千葉県においてモデルプランを示す際に、地域の特性に応じた連携の提案ができるのではないかと考えた結果である。



交流グループでの協議の様子

保幼小、行政の関係者が一緒に話し合った中で、

- ・幼稚園や保育園で経験していることもあるので、小学校ですべて説明しなくてもよいのではと感じた。(小学校教諭)
- ・年長でここまでできるということは、小学校でできることはたくさんある。(小学校教諭)

- ・小学校は計画が大事。幼児教育は記録が大事。違いがあるが、幼児教育で体験の後に小学校教育で知識がきちんとつけられている。(幼稚園園長)
等の意見が出され、互いの認識を深めていくきっかけとなった。

(3) 「5歳児の学びのカリキュラム」の活動実践

ア 目的

- ・活動参観を通して「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が、具体的にどのようなように表れているのかを見取り、記録する。
- ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の表れが、どのような教員・保育士の援助や環境構成の工夫から生まれたかをまとめる。

イ 実践

No.	実施月	活 動 名	実 施 施 設
1	月	収穫祭をしよう	富津市立中央保育所
2	11 月	焼き芋会をしよう	浦安市 みのり保育園
3	11 月	みんなでそうだんしよう	館山市立九重こども園
4	11 月	レストランごっこ	木更津市 岩根みどり幼稚園
5	12 月	こままわしをしよう	浦安市 みのり保育園
6	1 月	ゆうびんやさんごっこ	千葉市 めぐみ幼稚園
7	1 月	指人形劇	千葉市 めぐみ幼稚園
8	1 月	最後までがんばろう	館山市立九重こども園
9	1 月	いろんなたねをしぼろう	浦安市 みのり保育園
	2 月	乗り物体験ツアー	富津市立中央保育所
11	2 月	お店屋さんをしよう	浦安市立青葉幼稚園
12	2 月	ドッジボール大会に向けて	木更津市 岩根みどり幼稚園

ウ 具体的な実践例

実践例 1 11 月 浦安市 みのり保育園「焼き芋会をしよう」

① 主に育っている姿（「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」）の表れ



【思考力の芽生え・自然との関わり】
隣まで続いているかなと予想して掘る。



【思考力の芽生え・協同性】
レンガの位置を考えながら協力する。



【言葉による伝え合い】

火おこしに苦勞する保育者を応援する。 芋を使った野菜電池実験に興味をもつ。

② 保育士の援助や環境構成の工夫

- ・ 事前に焼き芋会について何が必要なのか話し合い役割分担をする。
- ・ 積み木遊びの経験を、芋を焼く時の炉づくりに生かす。
- ・ 昔の火おこしの道具を使ったり、電池とアルミホイルを使ったり、火をつけることの難しさを味わわせ、どうすれば火がつくか考えさせる。
- ・ 保育者自身が、試行錯誤している姿を子どもたちに見せる。
- ・ 保育者が、地域の方や郷土博物館の指導員の方に話しかけ、幼児も接しやすい雰囲気を作る。

③ 話し合いによる参観者の気づき

- ・ 畑への移動の際の自然観察や、土の中で虫を見つけた経験が、生活科の「春をみつけよう」「秋をさがそう」などに生かされる。(小学校教諭)
- ・ 時間のなかで行うと急がせがちになるが、子どもたちのつぶやきをしっかりと生かしている。(幼児教育アドバイザー)
- ・ 幼児に対して肯定的な言葉がけが多く、レンガの積み方など、できたことをすかさず認め褒めている。(研究指導主事)



【思考力の芽生え】

実践例 2 1月 千葉市 めぐみ幼稚園「ゆうびんやさんごっこ」

① 主に育っている姿（「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」）の表れ



【数量・図形，文字等への関心・感覚】

絵や言葉で伝える。



はがきや切手を販売する。



【協同性・社会生活との関わり】

はがきが届くよう、やり方を確認する。



【言葉による伝え合い】

手紙の出し方の相談に応える。

② 教員の援助や環境構成の工夫

- ・届いたハガキを子ども達の前で読み上げることで、様々な表現の仕方を知るとともに、喜びを感じられるようにしている。
- ・わからない文字は、教員が別の紙に書くなどして、文字に書き順があることや、句読点のつけ方などのルールがあることがわかるようにしている。
- ・郵便ポストや仕分け箱を、目で見えてわかりやすい場所に設置している。
- ・書きやすい鉛筆（2BやB）や色鉛筆をあらかじめ用意されている。
- ・遊びを展開するための広いスペースを確保している。

③ 話し合いによる参観者の気づき

- ・役割分担などがうまくいかない時でも、子ども同士での話し合いを大切にしている。（長期研修生）
- ・年賀状の時期に、子どもたちの関心が高まり、活動につなげている。
- ・近隣の小学校にも、幼稚園での取り組みを参観してほしいと願っている。（研究指導主事）
- ・子どもたちの主体性を大切にし、教員からの声かけを少なくしている。（研究指導主事）

6 今後の方向性

幼稚園等、小学校及び行政の様々な立場の職員が、幼児教育の実践をともに協議し、その実践を振り返ってきた。その中で、幼児教育への理解を深め、小学校教育へのつながりを意識し、小学校での実践も計画した。

幼小の接続で、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を小学校の実践でどのように生かしていくか。各園と小学校がどのようなカリキュラムのつながりをすれば、円滑な接続になるのかを明らかにしていきたい。